

# 日蓮教学における「互為主伴」の解釈について

—天台三大部本末・注法華經・御聖教を中心として—

米澤立晋

## 目次

- 一、問題の所在
- 二、天台三大部本末にみえる「互為主伴」
- 三、注法華經にみえる「互為主伴」
- 四、御聖教にみえる「互為主伴」
  - (一)「名目見聞」
  - (二)「法華宗本門弘經抄」
  - (三)「開迹顕本宗要集」
- 五、おわりに

## 一、問題の所在

中国および日本仏教史上における教主論の展開に注目すると、諸宗派諸師が種々の教学用語を用いて考究されていることが知られる。とりわけ、「一仏二名」という教学用語については、これまで日蓮門下のみならず諸宗派諸師の引用方法を提示し少しく考察を加えてきた。そうした中、「一仏二名」と類似する表現として「互為主伴」という教学用語の存在に気づく。「互為主伴」とは、華嚴教学に端を発するとされ、「互いに主伴となる」と読めることから、お互いが主と客となり客となると定義することができ<sup>1)</sup>る。また「互為主伴」の語も「一仏二名」と同様、古来より中国・日本仏教史上の種々の論疏類において縦横に用いられていたようである。では、「互為主伴」という教学用語について、日蓮教学史上においてどのように解釈がなされてきたのであろうか。本稿では、まず天台三大部本末に見える「互為主伴」の引用箇所を確認する。次いで日蓮聖人（一一三三—一一八二、以下聖人）の「注法華経」、さらには八品門流の祖である日隆聖人（一三八五—一四六四、以下隆師）の御聖教に焦点を当て、「互為主伴」の解釈について考察したい。

## 二、天台三大部本末にみえる「互為主伴」

そもそも「互為主伴」という教学用語は、種々の論疏群と同様に、中国・日本天台教学史上における諸師の著述中においても多用されている。そうした中、天台三大部本末に焦点を当てると、「法華玄義釈籤」に一箇所、「法華文句記」に四箇所<sup>2)</sup>の引用が確認でき、該文を挙げると以下の通りである。なお、天台三大部本末を含め、

以下の引用文中に見える「互為主伴」の語については、便宜上ゴシック体および傍線を付した。

①彼十方說法法人同被加害者同。是則化主眷屬並以一身無量身互為主伴同而不同一身多身一多自在。<sup>5</sup>

②若依下約教。兩尼吒下並注云云者。応明尼吒百億尼吒十方尼吒及遍法界。以分四教初文藏也。百億即是衍初通教。十方法界即是別門。一成一切成故。十方塵刹起四威儀。互為主伴。<sup>6</sup>

③彼華嚴經加四菩薩說菩薩因果。能加但是迹仏主伴。故不仮集仏。但云十方互為主伴。仍不云伴是仏分身。但云眷屬而已。<sup>7</sup>

④縦令十方互為主伴。十方亦復不離一塵。一塵祇在此台此葉。当知祇是迹中依正。<sup>8</sup>

⑤引梵網等三結經者。以義大旨与三經同。而義意撮要。若華嚴中十方臺葉互為主伴。此梵網經唯一台葉。故天台戒疏判云。華台華葉本迹之殊。<sup>9</sup>

①『法華玄義積籤』では、十方の諸仏が法を説くことで、人や法も同様に慈悲の力で衆生を助け護られるとする。すなわち、教主や仏の説法を聞き信行する者は、一身であり無量身でもあることから互いに主伴となる関係性を持つとしている。このことは、一つのもので多くのものが互いに融けあつて妨げなく、しかも各々の本質

を失わないことを示した一身多身・一多自在と同様であると同時に不同でもあると示している。

次に②⑤は、いずれも「法華文句記」中に引用される箇所である。②は、釈方便品中に見える尼吒、すなわち色究竟天に関する記述である。色究竟天とは、色界の最上にある天界で大自在天が住む世界とされ、「大日経」「金剛頂経」が説かれる場所とされている。妙楽大師湛然（七一―七八二、以下湛然）は②において、色究竟天を四教に約せば、色究竟天（藏）・百億の色究竟天（通）・十方の色究竟天（別・円）とそれぞれ定義し、それらが森羅万法の世界に遍く広がっていることを示すことで一切皆成が実現すると捉えている。また俗世間においては、行・住・坐・臥という四つの修行を實踐することで互いに主伴の関係となることを提示している。

③では、「華嚴経」に説かれる法恵・功德林・金剛幢・金剛藏という四菩薩に対し、因果を加えて説く箇所である。湛然によれば、たとえ菩薩に能動の義を与えたとしても、それは単に迹仏の主伴を示したものに過ぎず、仏を來集するものではないとする。つまり、十方世界の諸仏が互いに主と伴の関係となることを示したものであり、伴（從属するもの）とは仏の分身ではなく、あくまで眷属であると定義している。

④の引用は、たとえ十方の諸仏が互いに主伴の関係になったとしても、十方の諸仏は一微塵も離れることとはないとしている。この一微塵とは、仏・菩薩が座る蓮華台を指し、あくまで迹中の依報と正報であることを知るべきであると注意を促している。

そして、⑤において湛然は、「梵網経」などの三種類の結経（本経の要旨をまとめて、流通の目的をもって説かれた經典。天台教学では、「華嚴経」の結経を「梵網経」、「涅槃経」の結経を「像法決疑経」、「法華経」の結経を「観普賢菩薩行法経」とする。）を引用することは、その大意については本経と同様に解することができ、その義も本経の最要が収録されたものとする。例えば「華嚴経」には、盧遮那仏が蓮華台世界に住して十方に千葉百億の釈尊を

化現し菩提の心地法門を説くことで、互いに主伴の関係となると説かれている。しかし、『華嚴經』の結經である『梵網經』には、ただ一台葉としか触れていない。この問題については湛然是、天台大師智顛（五二八―五九七、以下智顛）の『梵網菩薩成經義疏』を引用し、華台や華葉はあくまで本迹論について説かれたものであると標榜している。

以上、天台三大部本末中にみえる「互為主伴」の引用について解釈を加えてきた。湛然是、①「法華玄義釈籤」では、仏と修行者は互いに主伴となる関係性を有すると主張していることが理解できる。また「法華文句記」中に見える「互為主伴」の引用は、②において別教と円教を兼ねる華嚴教學を基礎とした色究竟天についての記述を含め、いずれも華嚴教學に関係する解釈として「互為主伴」の語を用いていることが注目できる。

### 三、注法華經にみえる「互為主伴」

次に、日蓮遺文中に「互為主伴」の引用があるのか否かについて通覧すると、真蹟の有無を含め「互為主伴」の語は確認できなかった。ただし、聖人所持の『法華經』に諸經論釈の要文を集録注記を施したとされる、『注法華經』中において四箇所の引用が認められた。よって、ここでは『注法華經』中に確認できた「互為主伴」の解釈について検討したい。

①我仏所亦説十住。衆云眷屬如足無有増減。仏等。我等承仏神力來入此會。為汝作証。如於此會

十方所有一切世界悉亦如是

（七）上、一切阿土土十方衆、互爲主伴、圓式也。次、後、佛、入、十、受、平、入、十、他、化、土、十、圓、式、皆、以、如、是。

（一〇）

日蓮教學における「互為主伴」の解釈について（米澤立賢）

②記八云。彼華嚴經。加四菩薩。說菩薩因果。能加但是迹仏主伴。故不<sub>レ</sub>假集<sub>レ</sub>仏。但云十方互為主伴。仍不<sub>レ</sub>云伴是仏分身。

③又云。彼十方説法。法同人同被加者同。是則化主眷屬。並以一身・無量身互為主伴。○満中諸仏。凡集幾許花臺<sub>レ</sub>耶。

④記九云。引梵網等三結經者。以義大旨与三經同。而義意撮<sub>レ</sub>要。若華嚴中十方臺葉。互為主伴。此梵經唯一臺葉。故天台成疏判云。花臺・花葉本迹之殊。

『注法華經』中に見える「互為主伴」の使用箇所は、授記品、見宝塔品、從地涌出品、如来寿量品の四箇所であった。①は、授記品「仏於其中 一度無量衆 其仏法中 多諸菩薩 皆悉利根 転不退輪」彼国常以菩薩莊嚴 諸声聞衆 不可<sub>レ</sub>称<sub>レ</sub>数 皆得<sub>レ</sub>三明 具<sub>レ</sub>六神通 住<sub>レ</sub>八解脱 有<sub>レ</sub>大威徳」とある経文の裏面に、「華嚴經」を注記している。具体的には、『華嚴經』十住品中の法惠菩薩が諸仏の加護を受けて無量方便三昧に入出し、十住の法門を説示する箇所である。この文を解釈すれば、『華嚴經』では菩薩が修行すべき十住について仏界においても十住があると説いている。また、仏の説法の会座に集まる大衆や、仏の説法を聞き信行する者についても増減はなく、衆生は仏の神力を承けて説法の場に来入し、仏は衆生のために成仏を証明したとするすなわち、この説法の場のように、十方世界においても同様のことが言えるのであると説かれている。そして聖人は『華嚴經』の文を総括し、切利天王の十方便を互に主伴となす儀式であるとみなし、夜摩天王・兜率天王・

他化天王の儀式も同様であるとして「互為主伴」の語を用いていることが分かる。

②は、見宝塔品「善哉善哉。釈迦牟尼世尊。能以平等大惠教菩薩法。法所護念妙法華經。為大衆說。如是如是。釈迦牟尼世尊。如所說者。皆是真實。」中に注記が確認できる。見宝塔品では、釈尊が「法華經」を説かれるに際し、多宝塔が涌现した後、多宝仏が釈尊の教えは皆これ真實であると証明する場面であり、ここで聖人は「法華文句記」③の文を引用している。

③は、從地涌出品「世尊。如此之事世所難信。譬如有人。色美髮黑年二十五。指百歲人言是我子。其百歲人亦指年少。言是我父生育我等。是事難信。仏亦如是。」と説かれた、いわゆる父子老の問いの裏面に「互為主伴」の引用が見られる。聖人は、「法華玄義積籤」①を引用した上で、満願した諸仏はその中に蓮華の台座に鎮座する仏・菩薩をどれほど集めることができるのかと記している。

そして④では、如来寿量品の冒頭に聖人は「法華文句記」⑤の文を注記していることが確認できる。

以上、「法華華經」中に見える「互為主伴」の引用について概観してきた。聖人は「互為主伴」の語を用いる場合、「華嚴經」を引用した上での解釈や、「法華玄義積籤」①、「法華文句記」③⑤の引用に留まっていることが分かる。つまり、「法華華經」を確認する限り、聖人が久遠本仏について論じる際、独自の法門として「互為主伴」の語を使用することはなかったと推察する。また「觀心本尊抄」には、⑤と類似する文として、「華嚴真言等諸宗依經往劫之或十方藥毘盧遮那仏」と記されている。この記述からも、聖人は「互為主伴」について考える場合、あくまで華嚴の教主である毘盧遮那仏を想定していることが示唆され、「法華經」の教主である久遠本仏について「互為主伴」の語を用いた解釈はなされていないと思考する。

#### 四、御聖教にみえる「互為主伴」

これまで天台三大部本末や、「注法華經」中に見える「互為主伴」の引用について概観してきた。特に『注法華經』では、「法華玄義釈籤」「法華文句記」からの引用が大半を占め、その内容は華嚴教学を中心とした解釈の範疇であると推察できる。では聖人滅後、日蓮門下において「互為主伴」の解釈がどのように展開されていったのであろうか。そこで、隆師に焦点を当ててみると、御聖教中には「互為主伴」の語が複数確認でき、管見の限り、「日蓮所立本門法華宗五時四教名目見聞」（以下、「名目見聞」）九箇所、「法華宗本門弘經抄」一箇所、「本門法華宗開迹顯本宗要集」（以下、「開迹顯本宗要集」）三箇所の計一三箇所が看取できる。<sup>(19)</sup> よって、ここでは御聖教中に見える「互為主伴」の引用について提示し検討したい。

##### (一)「名目見聞」

「名目見聞」一六卷（未定）は、天台教学の四教五時判を当宗の立場より解説したものとされる。<sup>(20)</sup> その中で「互為主伴」の語は九箇所確認でき、御聖教中最多であった。そこで該文を挙げると、⑤⑧の記述が提示できる。

- ⑤日蓮宗義云 如向之口伝者顯露不定、此土ノ漸機ヲ為正意故、十方相對シテ更ニ無所用ノ物也、然レハ頓機ヲ為正意、日ハ花嚴頓教ノ寂場ノ十方羣衆、互為主伴ト与テ漸片相手ニスル時ハ漸機ニ秘シテ十方ト与テ此座ト相對シテ頓漸更ニ互ニ可レト論議不定云事其ノ道理分明也。<sup>(21)</sup>



⑥尼崎流ノ相伝ニ云 法花經迹本ノ兩門ハ此ノ界ノ他方ノ十方通同ノ如一仏土トスル深義ヲ最初成道ノ花嚴三重ノ本末ノ朽木書ニシテ台上ハ表シ本門葉上葉中ハ表ス迹門ヲ云々。台上ノ頓教ノ葉上葉中ヨリ鹿苑阿含ト漸教ノ出生シテ以テ二乗ヲ為シ正義ト而シテ顯露不定ノ化儀ヲ云々。然レハ台上ノ頓教ノ儀式ハ十方ノ豪華ト互ニ為シ主伴ト化儀ハ即チ此ノ座ノ頓教ノ辺ハ顯露不定ノ片相手ニ成、十方台上ノ互ニ為シ主伴ト辺ハ示ス此座ノ十方相望ノ秘密不定ノ化儀ヲ密令知見ニ諸菩薩而シ二乗ト与ハ菩薩成ス互ニ相知ノ秘密ヲ如此ノ前四味ノ間ハ台葉ノ本末頓漸相ニ隔テ雖レ成ス不定秘密ヲ至テ法花ニ還リ見ハ花嚴已來ノ台上ノ頓教ノ十方互ニ為シ主伴ト乃至十方相望ノ秘密ノ化儀法花本門ノ朽木書ニシテ本門三世益物ノ儀式ハ十方通同ノ如一仏土ノ十法界ノ依正ノ久遠ノ実義ヲ顯ス

⑦依レ之ニ梵網經云、へ我今毘盧舍那方ニ坐シ蓮花台ニ周廻千花ノ上復現ス千釈迦一花百億國一國一釈迦各々座シテ菩薩提樹ニ一時ニ成正覺ヲ云々。在レ文ニ分明也及レ消レ之ヲ、然ルニ就テ此文ニ花嚴ノ互為主伴ト云フ事有レ之、所以ニ葉上葉中ノ諸ノ釈迦相ト俱ニ其ノ各々弟子ノ思ハク我教主ノ仏ハ主也、余葉ノ仏ハ皆是レ伴也ト互ニ思フ之、故ニ互為主伴ト云也、付レ之ニ香写大師所造ノ探玄記ト云フ文ニ立テ三種ノ互為主伴ト一ニハ因主因伴ト二ニハ果主因伴ト三ニハ果主果伴ト云々、可シ思フ之ヲ。

法花宗義ニ云 此ノ三重ノ本末ノ義ヲ大旨如シ上ノ寂場之下ノ宗義ト云々。然ルニ此三重ノ本末ハ八教所撰ノ花嚴当分ノ意ト三重本末ノ互為主伴ノ機見ノ不同ノ更ニ不互相即ニ存テ行布門ノ次第ノ意也、若シ即ニ三重本末ニ明ハ円融相即ヲ葉上ノ方便土ト説テ三諦・三觀・三乘・四土相即ノ旨ヲ可明ス也

⑧宗義ニ云 花嚴經ハ帶權也ト云トモ教主ノ報身ヲ故ニ約シテ十方台葉互為主伴ノ儀式ト十法界身ト説也。其中ノ二乘身ハ

機分ノ二乗歟、或ハ仏意照了ノ分歟。其ノ上闕ノ二乗ヲ故ニ不明ノ十界互具<sup>21</sup>也。

まず⑤では、「法華文句記」⑤の引用が確認でき、日蓮義ではたとえ衆生が説法の座を同じくしていたとしても、その聴く者の機根の差によって領解の仕方が異なる教えでは意味をなさないと解釈する。なぜなら「法華経」の教えは、娑婆世界において直ちに高度な教えを聞いても理解できない者や、資質の劣った者を正意となすためである。また、速やかに悟りを開く素質を持った者を対象とした教えでは、末法では意味をなさない。例えば、「華嚴経」のような高度な教えを理解できる機根は、盧遮那仏が蓮華台世界に住して十方に千葉百億の積尊を化現し菩提の心地法門を説くことで互いに主伴の關係となるといった教えを享受できる。一方、機根の低い者は、浅い内容から次第に深い大乘などの内容に説き進む教えをもって成仏へと導かれる。これら利根・鈍根について、頓教・漸教は相互することで不定教を論じるべきであると隆師は主張している。

次に⑥では「互為主伴」の語が三箇所見られる。ここでは尼崎流の相伝として、「法華経」の迹門と本門における此土と他土は一仏国土であると捉えている。具体的には、インド釈尊が覺りを得た後、一四日間に渡って「華嚴経」を説かれたが、その内容は真実の法門を説く準備として蓮華台上においては本門を表し、葉上葉中は迹門を表すとしている。また台上とは、当初より大乘の深い道理を説く場であって、機根に合わせて「阿含経」等といった小乗の浅い内容から、次第に深い大乘等の内容に説き進む教えを明かすことで二乗を正機とした。さらに、衆生が説法の座を同聴していても、その聴く者の能力（機根）の差によって領解の仕方が異なる不定教を説いている。これらを鑑みると、台上の頓教の儀式では十方の台葉は互いに主伴となり、仏が衆生を教導し感化する方法は、「華嚴経」の会座における機根の利鈍を互いに知ることと利益を受けることとなる。つまり、十方

台上において互いに主伴となる意味では、「華嚴經」と不定教・秘密教における化導の儀式を示したものであるとする。そして、仏が衆生の機根が異なっていることを考慮し、互いに気付かないように密かにそれぞれに異なった利益を与えようとする秘密教に諸菩薩を知見したものであると規定している。すなわち、二乗と菩薩とは互いに相手を見て知ることができないため、秘密という教えが成立したのであると結論づけている。

このように、前四味の間では、台葉の本末と頓教・漸教は互いに離れていることで不定教・秘密教を明かすことになるとしても、『法華經』に至って顧みれば、『華嚴經』以来の蓮華台上に座す盧舎那仏の説く大乘の深い道理の教えは、あくまで十方が互いに主伴となることを明かしたものである。そして、十方を相対した秘密教の化導の儀式は、『法華經』本門へと導く下絵であって、本門の三世益物の儀式は、十方を一仏国土が十界の依止である久遠本仏の実義を明かすためのものであると定義している。なお、これら「互為主伴」の引用は、いずれも『法華文句記』⑤からの引用であると思われる。

⑦では、四箇所の「互為主伴」の語が確認でき、『華嚴經』の結経とされる『梵網經』に説かれる三重本末の成道について述される所である。『梵網經』では、毘盧遮那仏は蓮華台上に座して遍く巡る葉上に千の釈尊を現じ、また一つの蓮華の中には百億の国があり、一国一国にそれぞれに釈尊が菩提樹下に座して悟りを得ていたのであると説かれている<sup>25</sup>。この文について隆師は、華嚴教学には「互為主伴」という義があり、諸々の弟子たちは葉上・葉中に坐している無数の釈尊のさまを見て、弟子たちの教主は台上に坐している毘盧遮那仏こそが「主」と定義している。また、葉上・葉中に坐している釈尊を「伴」と捉えることで、「互為主伴」の義が成立すると思考している。さらに隆師は、華嚴宗第三祖康藏大師法藏(六四三—七一三)『華嚴經探玄記』を取り上げて、三種類の「互為主伴」があることを提示している。具体的には、主も伴も菩薩とした「因主因伴」、主は仏であり伴

は菩薩であるとした「果主因伴」、主も伴も仏とした「果主果伴」の三種を紹介している。<sup>26)</sup>

一方、日蓮義としては、この台上・葉上・葉中を説いた三重の本末の主旨は寂滅道場を示したものであるとする。それは、法華体内に具足された華嚴の意と捉えることで、三重本末の「互為主伴」とは機根の不同によつたものであり、あくまで差別のある次第を提示したものに過ぎないと規定している。その上で隆師は、三重の本末について差別のない円融相即の立場で解釈するならば、葉上とはあくまで方便有余土を説いたに過ぎず、三観・三觀・三乘・四土の相即を明かすべきであると主張している。すなわち、⑦における隆師の「互為主伴」の引用は、『華嚴經』『梵網經』のみならず、『法華經』の思想をもつて『華嚴經』を解釈していることが注目できる。

⑧では、「一 華嚴經、十身、事」と題して論が展開される箇所である。ここで隆師は、日蓮義として『華嚴經』は衆生教化のために仮りの手段や方法を含み持っていると思考している。具体的には、⑤と思われる文を引用し、華嚴の教主は一見報身仏のように見えるが、その実は盧遮那仏が蓮華台世界に住して十方に千葉百億の釈尊を化現して菩提の心地法門を説き、互いに主伴となる儀式を明かすために法身仏であると主張している。また隆師は、『華嚴經』中において二乗身は機根を上根・下根に分けた上での二乗か、仏の本意を照らして認識したものか、さらには二乗の成仏を欠くために十界互具をあえて明かしていないのかと疑義を呈している。

## (二) 「法華宗本門弘經抄」

『法華宗本門弘經抄』一一七卷（本文一一三卷、目錄四卷）は、『法華經』を文文句句について解釈したものである。特徴としては当家の立場、すなわち本門八品の立場から天台三大部本末、及び中古天台の義に対して日蓮義を以て解釈を指摘したものである。言うならば、日蓮遺文を規範として、天台教学、さらには一切の經典群を解

明しようとしたものである。<sup>28)</sup>この「法華宗本門弘經抄」中において、「互為主伴」語は一箇所看取できた。

⑨ 仍て今の文の「又觀諸仏聖主」已下は妙法蓮華經体具の華嚴阿含方等般若等と觀心して文々句々を講ずべし、故に知んぬ華嚴阿含等の四味の辺は所開なり、妙法蓮華經は能開なり、迹門は所開なり、本門は能開なりと信心して之を読み之を講ずれば、名字信心觀心は明瞭なり、

(中略)

謂く「聖主師子」とは即ち此の土の盧舍那像の如きなり、「演說經典微妙第一」とは即ち此の土の「先照高山」の華嚴經を演ふるが如きなり「教諸菩薩」とは即ち此の土の七処等の会に声聞の人なきが如きなり、「照明佛法開悟衆生」とは即ち此の土の始め仏身を見て如来の恵に入るが如きなり。然るに「聖主」とは華嚴の十方世界互に主伴となるの主なり。又記の三に云く、聖、即是主、故云聖主。又云聖主、如師子。<sup>29)</sup>

⑨ 「法華宗本門弘經抄」中における「互為主伴」について確認すると、第二二帖、別序釈中に引用が見られる。ここでは、序品「また諸の仏、聖主師子を觀るに」<sup>30)</sup>以下の經文について隆師が解釈を加えている。前半部では、この經文以下の部分について華嚴・阿含・方等・般若等の教えは、法華体内に具足されたものとして捉えるべきであると主張している。なぜなら、華嚴・阿含等は前四味のため所開の教えであり、「法華經」の中でも本門(八品)の教えこそが能開の教えであるためとしている。

この立場を用いて後半部を解釈すれば、序品に説かれる「聖主師子」とは娑婆世界の盧遮那仏を指し、「經典

の微妙第一なるを演説したもう」とは、釈尊が大乗の機根を有する者たちに「華嚴經」を説いたことである。すなわち「諸々の菩薩を教え」とは、この世界で「華嚴經」が説かれた場所と説法を七処八会と言ひ、そこには声聞乘の人はいなかったことを明かしている。そして、「仏法を照明し衆生を開悟する」とは、仏身をみて如来の智慧に入るとし、「聖主」とは「華嚴經」に説かれる十方世界において互いに主伴となる「主」に該当するとしている。その証文として隆師は、「法華文句記」の「聖とは是れ主なり。ゆえに聖主という」<sup>31)</sup>「聖主は師子のごとし」といった文を引用していることが分かる。

### (三) 「開迹顕本宗要集」

「開迹顕本宗要集」六五卷（仏部第一の最略本を加えれば六六卷）は、題号にあるように当時の天台教学において論議された宗要集を算題に従つて本門八品の立場より解説されたものである。<sup>32)</sup>本抄において「互為主伴」の語は三箇所確認でき、いずれも五時部第二「爾前分身」中の引用であつた。このことは、隆師が久遠実成を語る上で「互為主伴」の語を範疇に置いていない可能性が示唆され非常に興味深い。そこで、実際に該文を挙げると以下の記述が挙げられる。

- ⑩ 仍て爾前諸經には二乗に對してこそ分身の説を憚ると云へども、菩薩等に對しては何の憚りかこれあらんや。されば華嚴、法華をば初後仏恵円頓、義齊と云ひ、初成道時純説円頓と宣ふ。故に凡夫大根性の頓機、金剛幢金剛藏等の住行向地の大菩薩等を所化として別円頓大の法を説き、十方臺葉互為主伴の分身の化儀明了なり。故に華嚴、法華其の理一体なり。<sup>33)</sup>

⑪故に爾前諸經には分身を明すと雖も分身の意を明さず、分身の意は法華經にあり。其の分身の意とは発迹顯本して本因本果無作三身の本地一仏身を顯し、此の眼を以て爾前諸經の分身を見れば今經の分身なりと云ふ意なり。

(中略)

記に之を受けて、但云<sup>三</sup>十方互<sup>二</sup>為主伴<sup>一</sup>仍<sup>レ</sup>不<sup>レ</sup>云<sup>レ</sup>伴是<sup>レ</sup>仏<sup>ノ</sup>分身<sup>ナリ</sup>但云<sup>三</sup>眷屬<sup>ニ</sup>而已<sup>ニ</sup>。末師の釈に云く、眷屬<sup>ノ</sup>菩薩<sup>ト</sup>者此<sup>レ</sup>則<sup>チ</sup>往<sup>リ</sup>日同行<sup>ノ</sup>知識<sup>ヲ</sup>為<sup>ス</sup>眷屬<sup>ト</sup>實<sup>ニ</sup>是<sup>レ</sup>分身<sup>ナリ</sup>教權<sup>ヲ</sup>未<sup>レ</sup>説<sup>ク</sup>且<sup>ク</sup>云<sup>フ</sup>眷屬<sup>ト</sup>と云へり。開目抄下卷の初めに委悉に之を判じたまふ、之を合すべし<sup>云</sup>。此等師資の解釈分明に爾前帶權の席に分身の説これあるべからずと云ふ事明白なり<sup>云</sup>。

⑫天台宗の義に云く、先づ八教の中、秘密には二乗作仏高ほ之を明さず、況んや久遠成道一身多身一多自在無作三身の遠由たる分身を秘密にも之を明すべけんや。但だ秘密の言広し不待時の法華などを秘密と云ふは、夫れは爾前にあらず但だ今經に明すに成るなり。次に帶方便と云ふは広く華嚴般若等に亘るなり。所以に華嚴には十方臺葉互為主伴と云つて本身分身と云はず、大集には与欲と云つて分身と云はず、般若は千仏同説と云て千仏分身と説かず、分身の実義を隠す故に帶方便とは云ふなり。分身の実義とは本地無作一仏を顯すべき遠由分身と云ふ事なり。

当宗の義に云く、八教の超不超は初重教相權実の意なり。仏身の上の本身分身と云ふ事は第二第三の教相、五味主の上の師弟遠近本迹の重の従本垂迹三世益物化道の始終種熟脱の応用の上に之を論ず、故に准今經者とは釈するなり<sup>云</sup>。

⑩は、「法華經」より以前に説かれる爾前諸經に釈尊の分身説はあるのか否か、という問いに対し隆師が解答する箇所である。隆師は諸説あるとしつつ、結論として爾前諸經の教えに分身諸仏の顕本は明かされていないとしている。その一例として、⑩では「法華文句記」⑤と思われる文を引用している。具体的には、爾前諸經では二乗に対し分身諸仏の顕本をあえて説かないことは理解できるが、菩薩に対しては憚る必要性がない。また、「華嚴經」と「法華經」の関係について、「法華玄義」では、「最初と最後の仏慧の円頓（即座に悟りに到ること）の意義は等しい」「初成道の時に専ら円頓を説いた」等と示されている。つまり、金剛幢菩薩や金剛威菩薩等が十住・十行・十回向・十地の菩薩を所化とする「華嚴經」を説き、十方台葉の諸仏は互いに主伴の関係にあることを明かすことで、分身諸仏が衆生を教導し感化したことは自明である。すなわち、華嚴と法華は分身という理法の一面においては一体と言えると隆師は主張している。

次に⑪では、爾前諸經は一見、分身諸仏を明かしているように見えるが、その顕本については明かされていない。なぜなら分身諸仏の顕本は、「法華經」のみに明かされ、迹仏を開いて本仏を開顯した久遠実成である。この眼をもって爾前諸經に説かれる分身諸仏を顧みれば、全て久遠本仏の分身であることが分かる。その上で隆師は「法華文句記」③の文を引用し、十方が互いに主伴であると記しているが、この伴とは本仏の分身ではなくあくまで眷属であると定義している。その証拠として、ある師の解釈として、「眷属の菩薩とは、遙か昔にともに修行をしたことで得た智慧を眷属と呼んでいるが、これこそが分身である。もし経説が方便であるならば、分身とは言わず眷属と呼ぶ。」とした文を引用している。この問題について隆師は、「開目抄」の下巻の始めに詳しく論じられていると指摘し、爾前諸經は権教・方便教を含み持った経説のため円教に藏・通・別といった権教を帯びており、一見、分身諸仏の顕本義があるように見受けられる。しかし、真の開顯は「法華經」のみであると結



論づけている。

そして②は、分身諸仏の顕本について説かれる箇所には、『法華文句記』⑤の引用と思われる「互為主伴」の解釈がなされている。ここでは天台宗の義として、八教内の秘密の教えでは二乗作仏はまだに明かされておらず、当然のことながら、久遠成道や一身多身・一多相即自在・無作三身などといった教えも明かされていない。また、『法華經』に説かれる三周説法を待たずして得道することを秘密と言うことは、爾前諸經の教えによるものではなく、ひとえに『法華經』の功德によるとしている。さらに隆師は、方便を含み持った教説はすでに華嚴や般若等の教えにおいても説かれていると主張する。具体的には、『華嚴經』において盧遮那仏が蓮華台世界に住して十方に千葉百億の釈尊を化現していることを互いに主伴となすと説き、本身分身とは説かれていない。また、『大集經』では与欲と説かれ、分身とは説かれておらず、『般若經』においても千仏同説とあつて、千仏分身とは説かれていない。よつてこれらの經説は、いずれも分身の実義を隠すために方便を含み持った教法であると言え、分身の実義とは、本地無作一仏を開顯するための仏であると規定している。

次いで当宗の義としては、『法華經』の超八醍醐は三種教相中、初重教相を示したものであり、あくまで権実判の範疇であるとする。一方、仏の本地身・分身については、第二教相の化導の始終不始終の相、第三教相の五味主上の師弟遠近不遠近の相、及び本迹判における本地仏が衆生救済のために種々の身を現することや、三世益物・種熟脱等といった仏の自在の救いの働きを加味した上で論じるべきであると標榜している。その証左として隆師は、『法華文句』「今經に準せば応に是れ分身なるべし。」<sup>(8)</sup>の文を提示している。

五、おわりに

以上、日蓮教学における「互為主伴」の解釈について、天台三大部本末・注法華経・御聖教を手掛かりとして考察してきた。天台三大部本末にみえる「互為主伴」の引用は、①「法華玄義釈籤」において仏と修行者は互いに主伴となる関係性を有する可能性を示唆していた。また「法華文句記」中に見える「互為主伴」の引用では、②の別教と円教を兼ねる華嚴教学を基礎とした色究竟天についての記述を含め、いずれも華嚴教学による解釈として「互為主伴」の語を用いていることが看取できる。

次に聖人の場合、真蹟の有無を含め日蓮遺文中において「互為主伴」の語は確認できず、「注法華経」中にその存在が見て取れた。その理由については不明であるが、「注法華経」中の引用方法から推察するに、日蓮教学独自の法門として「互為主伴」の語を駆使して弟子や檀越に教化する必要性を感じていなかったのではないだろうか。なぜなら、「注法華経」中に見える「互為主伴」の語は、「法華玄義釈籤」「法華文句記」の引用、及び華嚴教学の解釈に留まっているからである。つまり、「注法華経」を確認する限り、聖人は久遠本仏について「互為主伴」を用いて論じておらず、あくまで聖人自身の教学研究の一面として「注法華経」中に「互為主伴」の語を記されていたのではないかと思量する。

そして、隆師の御聖教中に見える「互為主伴」の引用は、聖人と同様に「法華玄義釈籤」「法華文句記」等に関係した解釈を中心としたものであり、隆師が釈尊の本因本果について用いられた「一仏二名」の引用と一線を画していた。隆師は在世当時、「注法華経」を閲覧することは困難な状況であったと思われる中、「互為主伴」の解釈について聖人と類似した引用方法を用いていたことは刮目できる。また⑦では、日蓮義として本門八品の思

想をもって華嚴教学に見える「互為主伴」の解釈を試みていることも注目できよう。ところで隆師在世以降、日隆教学の影響を受けたとされる日興門流の諸師は、釈尊と上行菩薩・釈尊と聖人・聖人と白蓮阿闍梨日興聖人(二二四六一—三三三三)の關係について、「一仏二名」や「互為主伴」の語を用いて教主論が展開された一面を窺い知れる。この問題については、日蓮教学史上における教主論を語る上で注視すべき点であると考ええる。

なお、日本天台宗諸師の著述中に見える「互為主伴」の解釈については今後の研究課題としたい。

#### 註

- (1) 拙著「慶林坊日隆教学の研究」(山喜房仏書林、二〇一八年)三三五頁以下、拙稿「日隆教学にみる釈尊観——一仏二名論を中心として——」(北川前肇先生古稀記念論文集 日蓮教学をめぐる諸問題)(山喜房仏書林、二〇一八年)、拙稿「一仏二名論の一考察——日隆と天台宗諸師を中心として——」(天台学報)(二〇一八年)第六〇号。また、一仏二名についての先行研究としては、株橋諦秀「日蓮聖人の寿量本仏観」(大崎学報)(一九六五年)第一一九号(「桂林学叢」第五号(一九六五年)補訂)、株橋日涌「観心本尊鈔講義」(法華宗宗務院、一九八二年)上巻五八六頁以下、株橋日涌「法華宗教学綱要」(東方出版、二〇〇六年)一二七頁、大平宏龍「慶林坊日隆教学の形成と特色」(法華コモンズ講義資料、二〇一八年)、平島盛龍「一仏二名論に関する一考察」(興隆学林紀要)(二〇一九年)第一六号、平島盛龍「日隆聖人の一仏二名論に関する一考察——一仏二名論と日蓮本仏論との懸隔——」(桂林学叢)(二〇一九年)第三〇号、平島盛龍「一仏二名論の一考察」(法華仏教研究)(二〇一九年)第二八号、平島盛龍「慶林坊日隆の一仏二名論」(花野充道博士古稀記念論文集 日蓮仏教とその展開)(山喜房仏書林、二〇二〇年)等が挙げられる。
- (2) 管見の限り、「華嚴経(八十華嚴・六十華嚴)」中に「互為主伴」の語は確認できなかった。この問題について、伝恵心僧都源信(九四二—一〇一七)「三身義私記」(仏書刊行会編「大日本仏教全書」(仏書刊行会、一九二二年—

九二二年）第三二卷三四八頁aでは、「若華嚴中。十方台葉。互為主伴。文心何。答。問。花嚴中。專不見。十方台葉。互為主伴。文。然何云。如此耶。答。花嚴八十。六十。二本文不見。但按之。可云取意也。既此云。説花嚴十方。亦説法同。人同。」との記述が確認できる。つまり「三身義私記」では、處遮那仏が蓮華台世界に住して十方に積尊を化現し説法することの趣意として「互為主伴」を用いられたのではないかと指摘している。

(3) 中村元『仏教語大辞典 縮刷版』（東京書籍、一九八一年）三七九頁。

(4) 「互為主伴」の語について、SAT大正新修大藏經テキストデータベース二〇一八年版 (<https://21.dzkl.u-tokyo.ac.jp/SAT/>) において探索を行った所、「118巻に用例あり／出現回数166件」との検索結果が出た。ただ、この結果は巻数毎のカウントであり、実際は69書、166箇所であった。また、浄土宗全書テキストデータベース ([http://www.doshuzensho.jp/jozensarch\\_pos/](http://www.doshuzensho.jp/jozensarch_pos/)) では、検索結果が「全47件」と出たが、実際は15書、50箇所であった。以上の結果を踏まえ、「互為主伴」という教学用語は、中国・日本仏教史上において通用していたと推察する。

(5) 高楠順次郎他編『大正新修大藏經』（大正新修大藏經刊行会、一九二四年—一九三二年、以下「正蔵」）第三三卷九五一頁a。

(6) 「正蔵」第三四卷二五一頁b。

(7) 「正蔵」第三四卷三一〇頁a。

(8) 「正蔵」第三四卷三二五頁c。

(9) 「正蔵」第三四卷三三〇頁c。

(10) 「日蓮聖人真跡集成」（法蔵館、一九七六年—一九七七年）第八卷九四頁、「定本法華經」（法蔵館、一九八〇年）上卷二六八頁。

(11) 「日蓮聖人真跡集成」第七卷二二五頁、「定本法華經」上卷三〇六頁以下。

(12) 「日蓮聖人真跡集成」第八卷二二七頁、「定本法華經」上卷三九〇頁。

(13) 「日蓮聖人真跡集成」第七卷一六〇頁、「定本法華經」下卷四〇七頁。

(14) 「正藏」第九卷二二頁b。

(15) 「正藏」第一〇卷八五頁c、大黒喜道編「調下本法華經」(佐渡日蓮研究会、二〇一二年)一七八頁以下、五〇六頁。

(16) 「正藏」第九卷三二頁b以下。

(17) 「正藏」第九卷四一頁c。

(18) 「定遺」第一卷七一〇頁以下。

(19) 隆師の著述中にみえる「互為主伴」の検索については、興風談所編「文献統合システム」二〇二二年度版a等を参考にした。

(20) 株橋諱秀「日蓮聖人教学の序説」「桂林学叢」(一九六三年)第四号等、大平宏龍「日蓮聖人教学概観 稿」(私家版、二〇一五年)二八頁以下等。

(21) 「日蓮所立本門法華宗五時四教名目見聞」(本門仏立宗立仏立教学院、一九六三年)九三頁。

(22) 「日蓮所立本門法華宗五時四教名目見聞」一一〇頁以下。

(23) 「日蓮所立本門法華宗五時四教名目見聞」一五五頁。

(24) 「日蓮所立本門法華宗五時四教名目見聞」四二六頁。

(25) 「正藏」第二四卷一〇〇三頁c以下。

(26) なお、「華嚴經探玄記」中には「因主因伴」「果主因伴」「果主果伴」の語はいずれも確認できなかった。ただ、中国華嚴宗第四祖華嚴菩薩澄観(七三八―八三九)「大方広仏華嚴經随疏演義鈔」(「正藏」第三六卷六頁a)には、「一果主果伴。謂遮那為主。十方仏爲伴。十方仏爲主。遮那爲伴。二因主因伴。謂此方法慧菩薩爲主。十方法慧菩薩爲伴。十方菩薩爲主。此方菩薩爲伴。三果主果伴。謂如来爲主。普賢等爲伴。此一亦名輔翼。亦得称伴。彼仏爲主。此方菩薩爲主。此方菩薩爲伴。」

日蓮教学における「互為主伴」の解釈について（米澤立晋）

薩為主伴。」とある。

- (27) 「日蓮所立本門法華宗五時四教名目見聞」四二六頁。
- (28) 株橋諦秀「日隆聖人教学の序説」、大平宏龍「日隆聖人教学概観 稿」三二頁以下等。
- (29) 「原文対訳日隆聖人全集」（御聖教刊行会、一九二五年—一九三四年、「原文対訳法華宗本門弘経抄」日蓮聖人御降誕奉讃会、一九七〇年—一九七一年再版）第三卷九四頁以下。
- (30) 「正蔵」第九卷二頁c。
- (31) 「正蔵」第三四卷一九九頁b。
- (32) 「正蔵」第三四卷一九九頁b。
- (33) 株橋諦秀「日隆聖人教学の序説」、大平宏龍「日隆聖人教学概観 稿」三四頁以下等。
- (34) 「日隆聖人御聖教 開迹頭本宗要集」（日隆聖人御聖教刊行会、一九五五年—一九八二年、以下「隆教」）第三卷三四頁。
- (35) 「隆教」第三卷三七頁。
- (36) 「隆教」第三卷七四頁。
- (37) 道暹「涅槃経疏私記」「正新纂大日本統蔵経」（国書刊行会、一九七五—一九八九年）第三七卷一五〇頁cか。
- (38) 「正蔵」第三四卷一一四頁b。
- (39) 拙稿「日蓮門下における教主論の展開—慶林坊日隆と日興門流諸師にみえる「互為主伴」の解釈をめぐって—」「興風」（二〇二一年）第三三号、拙稿「日蓮門下における「互為主伴」の解釈をめぐって」『宗教研究』（二〇二二年）第九巻別冊。

〈キーワード〉 日隆 注法華経 名目見聞 本門弘経抄 開迹頭本宗要集 互為主伴 一仏二名